

## 1、自然主義的利他主義

現在、世界の思想はさまざまな方向へ向けて激しく動いているが、注目に値するのは「自然主義的利他主義」の動向である。つまり、従来、「自然状態の人間は利己主義的であるが、人間が普遍的利益の重視や利他的な行為をすることができるのは、人間に固有の精神性による。この精神性は、自然科学の方法ではとらえられない」という考え方が逆転して、「自然状態の人間は利他的であるが、人間が普遍的利益の重視や利他的な行為をすることができるのは、人間のもつ自然的本性による。この自然的本性は、自然科学の方法によってとらえることができる」と考えられるようになってきた。

「人間は自然本性上社会的動物である」というアリストテレスの言葉を、現代の文化は、その「自然本性」を限りなく自然科学に認識可能と言う意味で解釈する方向を追求している。

アリストテレスの研究者の間では、キリスト教は捨ててもいいが、アリストテレスの徳倫理学は現代に生き残るという立場（徳倫理学）が登場してきた。この徳倫理学に見られる動向では、アリストテレスの立場は、現代の自然科学とも両立可能な自然主義として理解されている。徳と言えば、人間の「善さ」は「勇気」「節制」「知恵」「正義」という枢要徳にあり、これに「信仰」「希望」「慈愛」というキリスト教的な徳を加えた徳目が、個人の目標であると同時に、個人に幸福をもたらすものと見なされてきた。徳の倫理学の西歐的な原型は、アリストテレスにある。アリストテレス+キリスト教=トマス・アクイナスのカトリシズムという定式が13世紀に確立されたが、21世紀に分解して、その原型に復帰する動向が現れてきた。約700年間、西歐文化に大きな影響力をふるってきたカトリシズムのなかに分解のきざしが見えてきた。

「貢献する気持ちは人間の本能である」という言葉も、一種の自然主義的利他主義を表している。「貢献する気持ち」は、一種の「徳」と考えられるから、「貢献する気持ちは人間の本能である」という立場は、自然主義的な徳倫理学のなかに包括されるはずである。しかし、自然主義的利他主義の波はあまりにも大きすぎて、そのなかに含まれる「貢献心」という重大な項目に目を向けるにはいたっていない。

当面、日本の人文科学の領域では、イギリスを中心とする徳倫理学の動向を紹介し、自然主義的利他主義の立場が、西歐の正統的な思想として復権しつつある状況を多くの研究者に知らしめるという姿勢が必要であると思われる。

そして将来は「さまざまな徳」の具体相の研究に歩みを進めなければならない。西洋の徳倫理学では、「勇気」「節制」「知恵」「正義」が重視されてきたが、たとえば東洋の徳倫理学では「仁」という徳に重点が置かれていた。徳の東西比較論から、徳の具体相にまで、議論が進んでいけば、「貢献心」という主題も扱われることになる。

## 2、幸津國生「貢献人と言う人間像」(花伝社 2012)

筆者の幸津國生氏は1943年生まれ、日本女子大学の名誉教授である。ヘーゲル研究と時代劇の研究とを数多く公刊している。加藤尚武の長年の友人でもある。加藤が贈った瀧久雄「貢献する気持ち、ホモ・コントリビューエンス」(紀伊国屋書店)を受け止めて東日本大震災に対して人間のとるべき態度を問うという姿勢のなかから「貢献心」という答えを見出している。

「そこで筆者としては、その問いの一つとして人間の態度をめぐって「むかし」からある一つの問いと同じ問い、つまり、人間というものは人間相互の関係においてどのような態度を取るべきなのかという問いをあらためて立てたい。そしてこの問いに対して、これも「むかし」からの答えと同じく次のように答えたい。すなわち、一般に社会に生きるわれわれ一人ひとりの人間には他の人間に対して一つの態度を取ることが求められる、と。その態度とは、他の人間のために〈貢献〉する態度である。」(同15頁)

東日本大震災に対して「自分はどのような態度をとるべきか」という問いを立てて、「貢献」という言葉に、その答えを見出した人は、筆者・幸津國生がボランティア活動、社会貢献活動の例をあげているように、瀧久雄氏の著作をまったく知らない人々にまで及んでいるが、幸津氏はそうした気持ちの「立て直し」が瀧久雄氏の著作の影響のもとでおこない、自ら「貢献心」をさらに広い視野のなかから見直そうとする。

「そこには〈貢献〉の心、つまり「貢献心」が「本能」として〈人間〉には備わっているとすする原理的な立場が成立することになるであろう。この立場は、人間が〈人間〉として生きるということについて、それは一人ひとりの人間が他の人間に〈貢献〉する態度を取るという「本能」において実現されるとするのである。これは、「人間」概念による〈人間〉についての認識の新しい段階を示すものであるかもしれない。そこで、われわれはこの立場による根拠づけが妥当であるのかどうかについて吟味しなければならない。この原理的な立場に関連して、思想上直接的には「貢献」という語は用いられないにせよ、同様の立場が別の語によって表現されてきた。本書ではそのうち、二つの伝統について触れたい。すなわち、一つはキリスト教的伝統における「隣人愛」であり、他方では儒教的伝統における「愛」である。」(同35頁)

この書物には、「隣人愛」の伝統を示す、ルター、ロック、ルソー、ヘーゲルなどの引用文があるが、「隣人愛」とは他者への貢献が自然的な自発性であるということを裏書きしていることができる。

儒教の日本的な展開として伊藤仁斎の「仁即愛」の思想が、取り上げられるが、そこには藤沢周平の時代劇のなかの「人情」と通ずるものがあると、幸津氏はいう。本書は貢献という概念の思想的な展望を考えると、不可欠となるような拠点を東西にわたって追求している点で、重要な業績である。

## 3、自然の動機 natural inducement

幸津氏が引用したロックの言葉に「他人を愛することは自分を愛することと同様に人間の義務であるということを経験したのは万人の等しく持っている自然の動機 **natural inducement** である」(幸津同書138頁)というのがある。「利他主義は利己主義と同様に自然の本能である」と解釈することができる。この意味での自然主義は、創造説にもとづく自然主義と呼ぶことができる。つまり、「そのような自然を持つものとして神は人間を創造した」という考え方が背後にある。

「自然界に存在するあらゆる合目的性は、神による創造の証である」という自然主義である。これに対して「自然界には人知のおよびもつかない合目的性が存在するが、それを説明するのに<神による創造>という仮定は必要がない。進化の結果であるという自然主義的な説明が可能だからである」というのが、進化論という自然主義である。

おそらく「沈黙の春」を書いたレイチェル・カーソン(1907-1964)が創造説と進化論を両立可能だと信じる最後の人であるかもしれない。

DNAの塩基配列の解読が、進化論の正しさの証拠と見なされるようになると、創造説にもとづく自然主義を信じていた人々が、無神論としての進化論を信じるようになる。これが現代において、自然主義が大きな影響力を発揮するようになっているひとつの理由である。

K.Sterelny, R.Joice, B.Calcott, B.Fraser (ed.) *Cooperation and its Evolution* 2013 MIT は、生物学の全領域にわたって視野をひろげた「協力と進化」の総合的な研究書である。多方面にわたる26本の論文を集めているが「進化と協力の結びつきが進化生物学のいたるところにある **ubiquitous**」(p.11)という実感がする書物である。

この書物の中で F.Warneken : *Altruistic Behaviors from a Developmental and Comparative Perspective* は、次のような要点 **Conclusion** を掲げている。「私は人間の個体発生と発生学に生起するものとして幼児期の子どもの発達とチンパンジーやボノボとの比較研究に焦点をあてつつ、人間の利他的な行為の多様なあり方の包括的な概要を作ろうと試みた。最近の研究から導かれる帰結はヒトおよび他の霊長類は、利他的な行為、とりわけ手段の援助に必要な何らかの基軸となる能力を分かち合っている (**that humans and other apes share some of the core capacities required for altruistic behaviors, especially in the form of instrumental helping**) というものである。利他主義の現れは何らかの行為の領域に依存する。他者を助ける、資源を分かち合う、情報を分かち合うというような行為である。

このことは、さまざまな先行するメカニズムが働いているであろうということ、またそのようなメカニズムはヒトとその他の霊長類に不可欠であるとは限らないということを示唆している。利他的な行為に必要な基礎的な認識能力、行為能力はヒトの個体発生の初期の段階ですでに発生している。それはおそらく、ヒトがもっとも近接した進化的類縁と分かち合っていることを反映しているであろう。将来、研究がすすめば、ヒトのこのような利他主義の初期の形態が、より成熟した形態へと転化していくことが分かるだろう。利他的な行為を進化論的に維持していくのに役立つような決定的な先行メカニズムに特別の注意

が向けられるだろう。ヒトはももしかしたら、乳幼児や他の霊長類に見られる基礎的な利他的な傾向性を維持し、助長するユニークな社会的メカニズムを創造している。その結果、ヒト以外では見られないような利他的な行為という結果が生じたのかもしれない。(同書 p.417)

このようなヒトの倫理性を進化論的に研究するという作業についての日本語で読める著作は英語圏で発表されている文献の数にくらべて非常に少ない。

内井惣七「進化論と倫理」(世界思想社 1996年)

J. パラディス、G. C. ウイリアムズ「進化と倫理」(小林傳司、小川眞里子、吉岡英二訳、産業図書 1995年)

大槻久「協力と罰の生物学」(岩波書店 2014年)

E. ソーバー「進化論の射程」(松本俊吉他訳、春秋社、2009年)

「貢献心は、ヒトの本能である」という命題を、もしも「貢献心は利他心 altruism である。利他心は、ヒトの本能である」という命題に置き換えることが許されるなら、現代の進化論によって、ほぼ認められているということができる。

#### 4、心性と言葉

同じ言葉だと思っていると、意外につい方がずれていることに気づくことがある。たとえば英語の red と日本語の「赤」とは、重なる領域が広いが、英語で red とは言っても日本語なら「茶色」とは言っても、「赤」とは言わないという場合もある。

英語の rice が、日本語では「コメ」、「モミ」、「イネ」、「ゴハン」、「メシ」に対応する。牛肉の部位についてだと、英語で細かく分けているものが、日本語ではすべて「牛肉」で済んでしまうということもある。生活の必要の上で区別した方が好都合なものには、別の言葉が対応づけられる。

心性を表す言葉の場合には、適用される範囲の違いを確定することがほとんどできない場合がある。喜怒哀楽、知情意、真善美などさまざまな言葉の地図を描くことは、色名の地図を描くことよりもはるかに困難である。

「貢献する気持ち」と瀧久雄氏が表現したものを、英訳本では「HOMO CONTRIBUENS The need to give and seach for fulfilment」と表現しているが、副題を「与えようとする欲求と達成の追求」と翻訳すると、ここから日本語の「貢献する気持ち」を連想することは、非常に難しい。私が、多くの研究者に「貢献する気持ち」について論文を書いてくださいと委嘱したところ、キリスト教に親しんでいる人は、ほとんど例外なしに「自己犠牲の精神」について執筆してくれた。(「貢献する気持ち」ホームページ参照)

「貢献する気持ちは、利他心に含まれる」という命題に異議を唱える人がいるかもしれない。野球の選手が、「自分の打ったヒットがチームに勝利をもたらしたことがうれしい」と述べる時、それは自分の功績にたいする謙虚な表現などであって、その心にあるのは「功績を誇る気持ち」であって、これは「承認を求める気持ち」に属するという解釈をす

る人もいるかもしれない。

アーサー・ラブジョイ「人間本性考」〈鈴木信雄、市岡義章、佐々木光俊訳、名古屋大学出版会、1998〉の第四章に「人間に固有な願望としての承認願望」という論文が掲載されている。

その「ある情念」には、適切な名前がまだない。17・8世紀の思想家があれほど関心をよせた「情念」のことを考え直したいと、この筆者はいう。

「これから、一七・八世紀の著述家たちが、人間に固有な特徴であり、とりわけ外的行動の動機づけとして有力なものであるとしていた、ある「情念」についての考察を検討していくことにいたします。これらの情念は、私が先の講義で次のような三つの名で呼んだものに対応しております。

- a. 「承認願望」"自分自身や自分の行為や自分の成功に対しての自分の仲間による承認または称讃への欲望、またこの感情を彼らが表明してくれることへの欲望(「称讃への愛」)。
- b. 「自己称讃」"自分自身や自分の資質、行為、成功についての「よい評価」への欲望ないし性向。
- c. 「競争心」"様々な側面において自分自身が他者に優越しているという信念への願望、そして周りの者たちによってこの優越性が認知されることの欲望、また彼らによってそれを容認する発言がなされることへの欲望。

これらすべての欲望や「情念」について、一七・八世紀の著述家たちは、莫大な紙幅を費やして議論しておりました。」(同書143頁)

同時に、この筆者は、心性と言語についても、言及している。「17・8世紀の著述家たちは、史的淵源に関して心理学的用語を定義している NED のような権威ある辞書を手にしていませんでしたので、これらのテーマを叙述する際の彼らの用語は、残套ながら極度に変動し混乱しておりました。同じ「情念」に対して、様々な異なる名前が、それぞれの著述家によって与えられておりました。私が、これから、他者から与えられる称讃、感嘆、喝采への欲望を意味させるものとして用いようとしている「承認願望」 *apporovativeness* という語は、考察の対象としている一七・八世紀に於いては、あまり知られてはいなかったものであると思います。とは申せ、当時、「名声への愛」「栄光への情念」「名誉の追求」などといった言い回しで表現されていた欲望が、承認願望を意味していたことは文脈から読み取れることも多いのであります。高慢さ(*pride*)という名詞(これは当然のこととして自己称讃を指しておりますが)もまた、他者によるある種の、あるいはある程度の是認に対する欲望を含意しております承認願望を示すのにしばしば用いられておりました。では、(通常、称讃や栄誉への欲望の意味での)「高慢さ」というものが、人類にとって、如何に普遍性を持つものであり、最も強力な人間の動機として如何に抑制不能で主要なものであるかを指摘している多くの文章を引用したいと思います。(同145頁)

貢献を評価してもらいたいという願望が、人間に非常に広く認められるとすることは、一七・八世紀の思想家の言辞によって、明らかになっていると言ってよいだろう。

## 5、社会科学的アプローチ

これと部分的に重なり合う心性に「承認」(Anerkennung ドイツ語)がある。ナンシー・フレイザー、アクセル・ホネット「再配分か承認か」(加藤泰史監訳、法政大学出版社2012年)この書名の「再配分(再分配)」(Umverteilung)は英語のredistributionをドイツ語に訳したもので、国民の総収益をいったん累進課税制によって徴収し弱者救済のために再分配することである。経済学上の自由主義とは「再配分政策に反対すること」ともいえる。たとえばサッチャーの失脚の原因は、累進課税を人頭税に転換しようとしたことにあると言われている。

すると「再配分か承認か」という選択肢は、「貧者救済か貢献に応じた配分か」という選択肢を含意することになる。

「再配分というカテゴリーは、資本主義がフォード方式」時代を迎えた頃の道徳哲学と社会闘争とにとって重要であった。配分的正義のパラダイムは第二次世界大戦後の平等志向のリベラリズムが大いに構想される中で体系的に展開されて、当時の労働運動や下層階級の目標設定を定式化するのに最も適しているように思われた。国民に支持されていることが明らかだった民主的な福祉国家ではコンフリクトは主に資源の配分に関係し、普遍的な規範に関連づけて配分のカテゴリーを用いて展開された。差異の問題が等閑にされるなかで、平等志向の配分政治の目標設定によって正義の意味は汲み尽されているように思われた。簡潔に言えば、再配分と社会的承認の問題の関係を詳しく吟味する必要性はなかったのである。」(同書2頁)

ここから展開されてくる議論は、かなり難解であるが、労働問題が最低所得の保証を達成すれば解決されるというような「インセンティブ」理論に対して、承認の独自性を強調している。

「今日では承認に対する要求が、世界中で起こっている多くの社会的コンフリクトの原動力である。つまり、承認の要求は、マルチカルチャリズムをめぐる争いからジェンダーやセクシュアリティをめぐる闘争に至るまで、あるいは国家主権に対するキャンペーンやサブナショナルな集団の自律に対するキャンペーンから、いま再び活性化している国際的人権に対する運動に至るまで関わっている。もちろん、これらの闘争は種類が異なり、明らかに解放に関わる領域から非難されてしかるべき領域にまで及んでいる。それだからこそ私は、規範的な基準が必要だと主張しているのである。それにもかかわらず、承認という共通の文法に対してこのように広く依拠する傾向は著しく、政治動向において、地位をめぐる政治を再燃させるといったような画期的な変革を示している。」(同書109頁)

所得の大小ではなくて、プライド、アイデンティティ、経営参加などが、社会問題の下地になっているという認識を、この書物は伝えている。

貢献心という赤ん坊を載せた盥が、激流によって動かされている。もっとも大きな流れは自然主義的な利他主義という流れで、「人間は利己的な生物ではなく、高度の協力、利他的態度の能力を生まれつき持っている」という認識が、生物学、行動心理学などの領域に

広がっている。狭い意味での倫理学のなかでは、もともとカトリシズムの復権をめざして、エリザベス・アンスコムによって切り開かれた、「徳倫理学」が、キリスト教をすててアリストテレスの倫理学を復権させるという方向となって現れたのは、自然主義の動向があまりにも強烈だからである。

世界は、イエスの福音と世界の終末との「中間時」にあり、終末とともにすべての死者の肉体も復活して、神の審判を迎えるという教義を信じているという告白をすることは、多くの信者にとって不可能になってきている。

徳の倫理の伝統的な形態には「貢献心のすすめ」は含まれていないが、徳が、「一定の正しい行為を、その機会が与えられた時には、かならず自発的に行う心性」と定義されるなら、「貢献心は徳」であるということに誤りはない。しかし、徳の倫理学の研究者は、まだ徳目の一つ一つについて検討するにはいない。たとえば西欧文化ではもっとも代表的な徳は「勇気」であったが、勇気が現代でどのように意義づけられるかは、まだ検討されていない。徳倫理学のゆるやかな流れのなかで、貢献心という赤ん坊を載せた盥は、吟味と再評価をうける行列に並んでいるが、ほとんど放置されているようにも見える。

なぜ現代で自然主義の流れが強くなったかと言えば、まず第一に挙げられるのは、DNAの分析によって進化の過程が具体的に示されるようになり、「進化論か、神による創造か」という選択肢が、進化論の方に傾いて、元には戻らないということが受け入れられるようになったことである。

第二にCTやMRIの影響も指摘しなくてはならない。最初の商業的なCT (Computed Tomography) は、Thorn EMI 中央研究所で英国人のゴッドフリー・ハウズフィールドによって発明された。これは、コンピュータによる装置の制御や画像処理を行うことができるものであった。ハウズフィールドは1967年に考案し、1972年に発表した。また、マサチューセッツ州のタフス大学のアラン・コーマックは独自に同様の装置を発明した。彼らは1979年のノーベル医学生理学賞を受賞した。

2003年にはMRI ( magnetic resonance imaging) の医学におけるその重要性和応用性が認められ、"核磁気共鳴画像法に関する発見"に対して、ポール・ラウターバーとピーター・マンスフィールドにノーベル生理学・医学賞が与えられた。

これらの装置によって、活動中の脳の状態を知ることができるようになったので、肉体(脳)が分解しても霊魂は分解されずに残り、死後の世界を経験するという信念が維持不可能になってきた。

第三に、冷戦という対立の崩壊という要因がある。冷戦時代には、ソ連側の支持するマルクス主義が「唯物論と弁証法」という哲学上の立場を強力に主張していたために、「何とかして唯物論の立場を否定したい」という気持ちを抱く哲学者が多かった。1989年ベルリンの壁の崩壊とともにマルクス主義そのものが崩壊してしまった。しがって、自然主義＝唯物論を主張することが、マルクス主義にコミットすることになるという恐れがなくなった。

以上が、世界の思想動向と「貢献する気持ち」研究の位置である。盥のなかの赤ちゃんを激流のなかに見失うことがないように、世界のあらゆる思想的な動向をたえず検討し、「貢献する気持ち」研究が定着することを期待して、努力を積み重ねたいと思う。(2014年6月3日、加藤尚武)